The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「シェルパ」と道の人類学――ネパール・ソルクンブ郡、エベレスト南麓地域における山道と移動する身体
Author(s)	古川, 不可知
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69295
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　古川不可知　）	
論文題名	「シェルパ」と道の人類学 ――ネパール・ソルクンブ郡、エベレスト南麓地域における山道と移動する身体

論文内容の要旨

本稿の目的は人間と道の関係について問い直すことである。エベレストの南麓にあたるネパール東部のソルクンブ郡クンブ地方を対象に、住民であるシェルパ族の人々と「シェルパ」を名乗ってトレッキング／登山観光に携わるさまざまな出自の人々が山道の上でおこなう実践を、参与観察に基づいて分析する。そして、「道がある」とはいかなる事態かについて考察する。

クンブ地方は世界的な知名度を誇る山岳観光地である。現在は年間3万人を超える観光客が訪れ、ネパール各地からも「シェルパ」を名乗って人々が参集する。険阻な山岳地帯であるクンブ地方では、「道（ネパール語：バト）」についての語りが頻繁に聞かれる。だが山中では、なにが道であるかは必ずしも明白ではない。

本稿では、①道とはなにか、②「シェルパ」とはどのような人々か、③世界のうちにあるとはいかなることか、という三つの問いを主軸に、Ⅱ部8章の構成をとって以下の通り考察を進めた。

第Ⅰ部では博論全体の理論的枠組みと、調査地の民族誌的概要を提示した。第1章では、道と歩くことに関する先行研究をレビューし、それらが分有する三つの課題、1.物理的な道そのものに対する視点の欠如、2.移動する身体の軽視(もしくは解釈主体としての人間の優越視)、3.ローカルな「道」概念の看過(もしくは普遍的な道概念の前提)を抽出した。またその背景には、流動する環境とそこを歩く身体の看過があったと指摘し、インゴルドの生態学的人類学を枠組みとすることで乗り越えを目指した。

第2章ではクンブ地方と「シェルパ」の歴史を整理し、16世紀のシェルパ族の移住から、ヒマラヤ探検／登山の時代を経て現在の観光地化に至る文脈のなかに位置付けた。また第3章ではそうした変化の渦中にあるシェルパ族の一村落、ポルツェ村の生活と変化について分析した。ポルツェ村では特に90年代になってエベレスト登山の仕事が急増し、生活が急速に変化したこと、また村人たちはそのような変化を従来の生業の延長線上に位置づけ、おおむね肯定的にとらえていることを確認した。

第Ⅱ部では、「シェルパ」を名乗ってエベレスト地域の山道を移動する人々の実践に焦点を当て、ポーター(第4章)、トレッキング・ガイド(第5章)、高所ポーター(第6章)についてそれぞれ分析した。そして第7章では、道とはなにかについて考察をおこなった。

第4章では、頭に100kg近い荷物を頭に担いでクンブ地方の山道を歩く「ローカル・ポーター」と呼ばれる人々の実践を中心に分析した。彼らは極度に荷重を増した自己の身体に基づいて、観光客に向けて整備された山道を別様に解釈しながら歩いてゆくこと、また荷運びを通した観光産業への参入に期待を抱いていることを論じた。

第5章では、トレッキング・ガイドたちへの参与観察を通して、山中で道を案内する彼らの実践を考察した。そしてガイドたちの仕事は、ポーターや観光客といった複数の移動者が持つ移動のリズムを調整し、目的地まで即興的に一つの流れを作り出すことだと論じた。

第6章では登山学校への参与観察に基づいて、エベレストを目指す高所ポーターたちの実践と、職業としての「シェルパ」という範疇についての認識を分析した。高所ポーターの仕事とは山中に道を作り出すことであり、その能力を尺度として拡大適用することによって、エベレスト地域に「シェルパ」という職業範疇が成立していることを論じた。

第7章ではここまでの考察にクンブ地方の山道を歩いた筆者自身の経験を踏まえて、峻険なヒマラヤの山間部において道とはなにか、道を歩くとはいかなる実践かを考察した。ここで主張したのは、道とは自然と文化、事物と観念、主体と客体、不在と完成のあわいにそのつど立ち現れる存在であるということであった。

第8章ではここまでの総括をおこなって結論とした。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　古川　不可知　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	准教授	森田　敦郎
副 査	教授	中川　敏
副 査	教授	栗本　英世
副 査	教授	白川　千尋

論文審査の結果の要旨

古川氏の博士論文、『「シェルパ」と道の人類学―ネパール・ソルクンブ郡、エベレスト南麓地域における山道と移動する身体』は、エベレスト南麓地域において主にガイド、ポーターとしてトレッキング・登山観光に従事する人々についての民族誌的な研究である。南アジア研究、ネパール研究の分野では、エベレスト南麓地域に居住するシェルパと呼ばれる人々についての研究は数多く行われてきた。標高3,000メートル近い高地に居住し、エベレスト越え交易による登山経験を豊富に持つシェルパは、ヨーロッパ勢力がエベレスト越え探検に乗り出した当初から山岳ガイド及びポーターとして重用されてきた。脱植民地化と観光化が進んだ第二次世界大戦後には、シェルパはエベレスト登山のにおける登山ガイドをほぼ独占的に担うようになり、「シェルパ」という語は、次第にエベレストにおける山岳ガイド一般を指す職業的なカテゴリーに転じるようになった。古川氏は、このような民族範疇から職業範疇への変容に焦点を当てて、前者（従来の民族範疇）をシェルパ、後者（職業範疇）を「シェルパ」と呼んでいる。本論文の議論の中心は、前車から後者への変容がエベレスト登山とその観光化の中でいかに生じたかを明らかにすることである。

長期のフィールド調査に基づく人類学的研究である本研究は、次の三点において重要な意義を持っている。第一に、本論文は、ネパール山岳地域において論じられてきた民族範疇及び民族集団の生成についての諸研究の最新の成果として位置付けられる。とくに本論文は、民族範疇の生成とその職業範疇への変容における身体・物質性の役割について検討した点で、先行研究に対して重要な貢献を行っている。これまでの研究は、民族範疇の生成と維持、日常生活の諸局面におけるその使用の繰り返しが、民族集団のリアリティを生み出すことを指摘してきた。これに対し、古川氏は、民族範疇と山岳ガイドとして職業範疇の異同をフィールドでの現実に沿って整理し、これらのカテゴリーの適用に際して、この地域の住民が持つ山道を歩く高い能力がいかに寄与するかを検討している。この分析において古川氏は、当地に固有の険しい環境において歩行可能な道を見出し、それを維持し、そこで観光客をガイドする能力、および観光産業の組織などが、「シェルパ」というカテゴリーの使用にいかなる影響を与えるかを綿密に検討している。

第二の貢献は、現在発展しつつあるインフラストラクチャーの人類学的研究に対するものである。道路、ダム、堤防、上下水道などの大規模な技術システムであるインフラストラクチャーとそれが社会の構成に及ぼす影響は、現在人類学の幅広い分野から関心を集めている。その中でも道・道路は、近代国家形成や経済開発と密接に関わるため広く関心を集めてきた。古川氏は、車道から、現地住民以外には識別すら困難な山地の小道に至るエベレスト南麓地域における道の多様性に焦点を当てるとともに、そこを移動する身体との関係について詳細に論じている。この地域においては、道はしばしば身体との関係において現れる相対的なものである。険しい山道や識別が困難な小道は、経験を積んだ身体を持つ歩行者にとっては道として現れるが、それ以外のものには険しい山地の景観の一部に過ぎない。こうした観点から古川氏は、この地域における身体と道の相互的な関係を明らかにし、従来の研究が見落としてきた、インフラストラクチャーの形成における身体の重要性を指摘している。第三に、古川氏の論文は、こうした身体と道の相互性を題材としつつ、身体と環境の関係を新たな視点から論じたという点で身体の人類学に重要な貢献を行っている。ここではとくに、T. Ingoldらの生態学的なアプローチを検討し、事例を通して批判的に発展させたことは高く評価される。

審査委員会は合議の上で、上記のような研究上の貢献により本論文が博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものであると認定した。